国語（その一）

第一問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

子どもへの気遣いは、(注1)ギリガンのいう「ケア」の典型だろう。私たちが子どもと接するとき、何らかの原則に基づいて、［　イ　］を解くように、子どもへの接し方を判断しているわけではない。子どもに対して何をするべきか、どんな言葉をかけるべきか、ということは、その子どもがどんな個性の持ち主なのか、どんなことを願っているかによって、左右される。子どもを気遣うためには、その子どもが置かれた具体的な状況を想像し、その子どもに共感できなければならない。だからこそ、そうした気遣いはケアなのである。

しかし、一方で、ケアは人間にとって労苦でもある。あなたが一人親で、子どもを独力で育てようとしている。そのときあなたはその子どもにケアをしようとしていることになる。しかし、仕事・家事・育児のすべてを引き受けようとした結果、あなたの心身はボロボロになる。あなたはその子どもをケアするべきかも知れない。しかしそれは、Aあなたに自己犠牲を強いることになるかも知れない。

このような問題に対して、一つの解決策を提示したのが、(注2)キテイである。彼女は、哲学者であると同時に、重い知的障害を持つ娘をケアし、生活をともにしてきた母親でもある。その経験が、彼女のケアの倫理の思想にも色濃く反映されている。

彼女はまず、伝統的な倫理学において前提とされてきた、B「自律性」を人間の条件として捉える発想に対して、鋭い批判を向ける。そうした発想に従うなら、自分のことを一人でこなせることが、一人前の人間の証（あかし）である、ということになる。それに対して、自分のことを一人でこなすことができず、他者に頼ってしまう人は、まだ一人前ではない、と評価される。自律性が人間の条件であるとしたら、他者への依存は、人間としての不完全さの証になってしまう。

しかし、こうした主張はそもそも正しくない。なぜなら、人間は、幼いときには必ず他者の力を借りなければならないし、老衰して死ぬ間際にも、やはり他者の力を借りなければならなくなるからだ。したがって「依存は、文化的にそれがどう考えられるかによっておおよそ条件づけられるとはいえ、出生と死が生きる者すべてにもたらされる限り、どうしても避けられない」ものである。それを否定することは、もはや、人間の存在そのものを否定することを意味するのではないだろうか。

国語（その二）

このような観点から、キテイは、そもそも人間は他者に依存する存在である、ということを、議論の前提に据える。人間は、ほとんどすべての人が誰かに依存しているのであり、同時に、誰かから依存されている。もし、誰にも依存せず、誰からも依存されていない人がいるとしたら、その人は極めて特殊な境遇に置かれていると理解されるべきなのだ。純粋に自律的に生活している人——そんな人が本当にいるかどうかさえ疑わしい——が、自分こそが「普通」だと思い込むなら、[c]その人は端的に事実を誤認しているのである。

そうであるにもかかわらず、自律性こそが人間の条件であると見なされるとき、誰かに依存し、誰かに依存されている人の存在は社会から覆い隠され、あたかもそんな人は存在しないかのように扱われてしまう。そうした状況が、ケアに追われることでボロボロになった人を、さらに追い詰めることになるのである。

それでは、このように自律性への偏重を批判するキテイは、ケアの倫理をどのように説明するのだろうか。彼女によれば、「依存者の世話をする仕事」は「依存労働」として理解されるべきである。彼女がケアのための具体的な作業をわざわざ労働と呼んでいるのは、それがケアの主体にとって、紛れもなく大きな負担であるからだ。

依存労働に従事する人——すなわち他者をケアする人——は、多くの場合、社会的に不利な状況に追い込まれている。

たとえば、ここに一人の女性がいるとする。この女性は、結婚して子どもを授かったことをきっかけに、それまで就いていた仕事を辞め、育児に専念した。彼女はケアする人、依存労働者になった。その際、仕事を辞めたことによって、配偶者に対し経済的に依存することになってしまう。母親として子どもをケアする彼女は、配偶者に離婚されると、非常に不利な状況に陥る。そのため彼女はもはや配偶者と対等な立場で交渉することができない。

このようにして、依存労働者は、誰のこともケアしないで済んでいる人、自律的に生活できる（かのように振る舞う）人に対して、自分自身も依存することになるのだ。キテイはその状態を「[d]二次的依存」と呼ぶ。

交渉上不利な立場にあるということは、二次的依存の状態にあることを指し、依存労働者自身が依存状態にあるといえる。協調的対立において、依存労働者がどれほどまで我慢するかを決める際、依存労働者が次の二つについてどう認識しているかが重要になる。まず、自分自身と依存者を支え依存関係を維持するのに必要な外部

国語（その三）

の資源に、どれほどアクセスできると考えているか、次に、自分を道徳的にも社会的にもまっとうだと思うために、依存者との関係を持続するのがどれほど重要だと思っているか、である。

X

では、いったいどうすれば、依存労働者の二次的依存を解消することができるのだろうか。キテイが訴えるのは、「外部の資源」を充実させることに他ならない。そしてそれは、社会が公正であるために必要不可欠な条件である、と彼女は主張するのである。

依存労働者が、自らを消耗させることなく他者へのケアを果たすためには、十分な外部資源が必要である。そうした外部資源は、社会保障として、依存労働者に公正かつ持続的に提供されなければならない。そうした社会保障を前提としなければ、私たちが健全に他者をケアすることなど不可能なのである。

こうした発想は、強い責任の思想からは出てこない。(注3)サッチャーは、「社会などというものは存在しない」と述べ、自己責任に基づく自助努力を称揚した。その考え方に従うなら、自分で子どもをもうけた親は、その責任を自分で取らなければならない。社会がそうした親に経済的な支援をしなければならない理由はない。そのような社会において、親は、外部資源を頼ることができなくなり、二次的依存から抜け出せなくなる。配偶者に不満があっても、それを我慢し続けなければならなくなる。この意味において、強い責任は他者へのケアの可能性を、むしろ閉ざすものになる。

（戸谷洋志『生きることは頼ること　「自己責任」から「弱い責任」へ』による）

（注1）ギリガン　―　キャロル・ギリガン。アメリカの倫理学者・心理学者（1936～）。
（注2）キテイ　―　エヴァ・フェダー・キテイ。アメリカの哲学者（1946～）。
（注3）サッチャー　―　1979～1990年のイギリスの首相（1925～2013）。

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一　空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 社会の問題　② 数学の問題　③ 人生の問題
④ 心身の問題　⑤ ケアの問題

国語（その四）

問二 傍線部A「あなたに自己犠牲を強いることになるかも知れない」とあるが、このようにならないためには、どのようにしなければならないのか。五十字以内（句読点なども字数に含む）で答えなさい。

問三 傍線部B「『自律性』を人間の条件として捉える発想」とあるが、このような発想によると、人間はどのようなことが求められるのか。本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部C「その人は端的に事実を誤認しているのである」とあるが、なぜ誤認だと言えるのか。その説明となるよう、次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

［　　］から。

問五 傍線部D「二次的依存」とあるが、これはどのような状態なのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 依存労働者の周りに自律的に生活している人がいるので、依存労働者がその人にケアをしてもらっている状態。

② 誰にも依存することなく、自分一人で自律的に生活したいと思っているのに、他者に依存せざるを得ない状態。

③ 道徳的にも社会的にもまっとうな依存労働者が、社会保障などには頼らずに自分でケアをしようとしている状態。

④ 依存労働者が依存している他者が本来ならば依存者のケアをしなければならないのに、ケアに積極的でない状態。

⑤ 自分がケアしなければならない人との関係を維持するために、自分自身が他者に依存しなければならない状態。

国語（その五）

問六 X に入る、次のア～エの四つの文の正しい並べ方として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

ア この点において、キテイはケアという行為を、極めてシビアに捉えていることが分かる。

イ たとえばそれは、幼い子どもをケアする母親が、パートナーに対して多くのことを我慢せざるをえない状況に他ならないのだ。

ウ 「外部の資源」が乏しく、また「依存者との関係」をどうしても守らなければならない場合には、依存労働者は、自分が依存している他者に対してどこまでも「我慢」を強いられることになる。

エ 依存労働者は、自分がケアしなければならない人を守るために、他者に対して依存状態に陥る。

① ア→ウ→エ→イ　② ア→エ→イ→ウ　③ ア→エ→ウ→イ
④ エ→ウ→ア→イ　⑤ エ→イ→ウ→ア

問七 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① できるなら誰にも依存することなく自律的に生活することが、人間にとって最も望ましい生き方である。

② 自らが招いた状況は、まず自らが責任を負うべきであるが、それが無理なときは社会に依存すればよい。

③ 現代では、結婚して子供を授かった女性は、配偶者と対等な立場で子育てができるようになってきた。

④ 依存者の具体的状況に即してケアを行わなくてはならないため、ケアをするのは心身ともに大変つらい。

⑤ 依存者の世話をする仕事がいくら大きな負担であるとしても、それを労働であると捉えるべきではない。

国語（その六）

第二問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ヨーロッパが舞台の映画を観(み)ると、Aお金持ちの邸宅の客間って大体壁全部が書棚ですね。そういう映画を何十本、何百本と観てきましたが、そこの家の主人が書棚から本を取り出して読んでるシーンてまずないんです。中には、最近成り上がって①フゴウになった人間が、貴族の古い屋敷を買い取ってそこに住んでるみたいな設定もありますが、その場合、この書棚の本は家具什器(じゅう)の一部としてたぶん「居抜きで買ったもの」なんだと思います。自分の蔵書じゃないし、別に自分の趣味でもない。でも、目障りだからこれ全部取っ払って古本屋に売ってくれということはどうやらしていない。たぶん「そういうこと」はしてはいけないという無言のルールがあるから。

ヨーロッパでは、功成り名遂げて、古くからある大きな屋敷を買い取った人間は必ずその屋敷の前の持ち主たちの蔵書に囲まれて暮らさなければならないという暗黙のルールがあったんじゃないかと思うんです。書斎で仕事をしていて、ふと顔を上げると、そこに『プルターク英雄伝』とか『ローマ帝国衰亡史』とかの革表紙の本が並んでいる。でも、この人は読んでないわけですね、それまでビジネスとか政治活動とかに忙しかったから。だから、書斎にある本は全部「読んでない本」なんです。たぶん死ぬまで読まない本。そういう何千冊もの本が毎日この書斎の主人に向かって「お前はほんとに無知だね。だから、B思い上がるんじゃないよ」というメッセージを無言で送って来る。

そういう古典を、きちんと革装して、金箔(ぱく)のタイトルを入れて並べておく理由はそこにあると思うんです。成功した人間は自分が読んでいない書物を見上げるたびに、書物から「お前は成功者として偉そうな顔をしているみたいだけれど、ここに集められた知的アーカイブのほんの一部さえ読んでいない。自分が世の中のことをほとんど知らない人間だということは思い知っていたほうがいいぜ」と説教されているような気になる。そういう説教を書物から聞かされることを日課とすること、それがヨーロッパにおいてはC社会的成功者に課せられた条件だったんじゃないか、そんな気がします。

日本の場合には「旦那芸」というものがあります。もう今はすっかり②スタれてしまいましたが、ある程度偉くなるとDお稽古事をしなきゃいけないという決まりがありました。お謡(うたい)を稽古したり、義太夫(だゆう)をお稽古したり。僕は観世流の謡と舞をもう30年くらい稽古しています。こういうお稽古事はけっこうお金がかかります。若いサラリーマンじゃできない。昔だったら部長さんくらいにならないと③ゲッシャやお役料を払えない。でも、ある地位になったらお稽古事をすることはほとんど義務化されていた。

国語（その七）

お稽古事を習うと何があるかというと、とにかく先生に叱られるわけです。最初から最後まで先生に叱り飛ばされる。初心者の時はもちろんですけれども、10年やっても20年やっても、相変わらず叱り飛ばされる。

昨日もお能のお稽古に行ったんですけれど、もう先生に怒られて怒られて。僕だってもう［イ］を過ぎていて、お迎えが近い歳なんですよ。その僕に向かって「努力が足りない」と言うんですよ。ひどいと思いませんか。もう努力できるような体力は残っていないんですけれども、72歳の僕を80歳の先生が叱り続けるわけです。道順が違う、拍子が違う、扇のさばきが違うとか、もっとゆっくりとか、もっと速くとか。ずっと怒られ続けでした。

でも、先生に怒られるところっていうのは、言ってしまうと、すべて「いかにも僕らしい間違い」なんです。僕という人間の本性が剝き出しになった失敗なんです。ただ不器用とか物覚えが悪いとかいうのじゃない。僕の失敗に④ロテイしているのは、「世間をなめた態度」とか「早呑み込み」とか、まさに僕の人間的欠陥がロテイしたところなんです。そこをピンポイントで叱ってくる。

昨日の場合だと、謡で「かっこうつけるな。いいとこ見せようとするな」ということを叱られました。僕が「ここはこの謡の『聞かせどころ』ですよね。ここはちょっと声を震わせたりした方がいいんでしょうか」と質問したら、「これだけ稽古してるのにまだ、そういう馬鹿なことを言って」と叱られました。【Ⅰ】

その時に、しみじみとお稽古事というのは「叱られるためにお金を払う」という仕組みなんだよなと思いました。謡や舞の技術を身につけることが目的じゃなくて、本当は偉そうにしている男たちに「自惚れるなよ。思い上がるなよ」と頭を叩くという教育的な仕掛けだったんじゃないかな。そういう気がします。【Ⅱ】

話を書物に戻しますけど、図書館もそういうものだと思うんです。図書館も思い上がりを叱るという教育的機能を担っていると思うんです。これが仮に、図書館に行ったら「自分が読んだ本」と「自分がこれから読む予定の本」だけで書架が埋め尽くされていたらどうでしょう。自分の「既知」で埋め尽くされた図書館って、図書館としては無意味だと思うんです。【Ⅲ】

図書館って自分が読みたい本を借りに行く場所じゃない、調べ物をしに行く場所じゃない。確かに、そういう機能もありますが、最大の機能は「無知を可視化すること」なんです。「思い上がるなよ」って、来館者の鼻っ柱を折る、「頂門の一針」を打つ。【Ⅳ】

書物っていうのは「異界に通じる門」ですから、専門家が守らなければいけないわけ

国語　（その八）

です。今日いらしているのはみなさん司書の方々ですけれども、実は、あなた方は「ゲートキーパー」なんですよ。知らなかったでしょうけども。みなさんはゲートを守っているんですよ。そして、このゲートの向こう側にはけっこう「やばいもの」が広がっているわけです。だから、素人が着流しで入っちゃ危ないことになる。そのためにゲートキーパーがいる。ここから先は異界が広がっているから、専門家の案内が要るよ、って。【V】

（内田樹『図書館には人がいないほうがいい』による）

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一　傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二　傍線部A「お金持ちの邸宅の客間って大体壁全部が書棚ですね」とあるが、この書棚の働きはどのようなことか。本文中から十字で抜き出して答えなさい。

問三　傍線部B「思い上がるんじゃないよ」とあるが、思い上がるという状態を意味する熟語を書きなさい。

問四　傍線部C「社会的成功者」とあるが、ヨーロッパではたとえばどのような者なのか。本文中から三十字以内で抜き出し、最初の十字を答えなさい。

問五　傍線部D「お稽古事をしなきゃいけない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 十年やっても二十年やっても上達しないことを改めて自覚し、自らの要領の悪さを反省するため。

② 日頃偉そうにしていても、自分よりもさらに偉い人がいることを知ることで、自らを鼓舞するため。

③ 周囲から偉い偉いとおだてあげられても、自分は何もできない人間であることを再確認するため。

④ お金を支払ってでも叱られることで、叱られている者の身になり、普段の振る舞いを改めるため。

⑤ 偉くなると人から叱られることが少なくなるので、痛いところをついてもらい、自らを戒めるため。

国語（その九）

問六 空欄**イ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 喜寿　② 白寿　③ 古希　④ 米寿　⑤ 卒寿

問七 次の一文を挿入する場所として最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

それがたぶん図書館の持っている最大の教育的機能だと思います。

① 【Ⅰ】　② 【Ⅱ】　③ 【Ⅲ】　④ 【Ⅳ】　⑤ 【Ⅴ】

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 図書館にいる司書は、本について専門家であり、本のことなら何でも知っているので、お稽古事の師匠のような人である。

② 図書館には自分が読みたい本があるのではなく、自分がこれから読まなければならない本が並べられてあるところである。

③ 専門家の案内が要る図書館に行くと、素人の来館者は卑屈になってしまい、偉そうに振る舞うことができなくなってしまう。

④ 自分にとって未知の世界が広がっている図書館は、自らの有限性を思い知り、無限の知に向けて開かれているところである。

⑤ 図書館は、関心のあることだけではなく、幅広い知識を身につけるべきであると来館者に思わせる教育的機能を持っている。

国語（その十）

第三問 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

学校教育と言えば、「生きる力」だ、「非認知能力」だと学習指導要領に入れて、教え込もうと一生懸命なように見受けられますが、ちょっと待って、と言いたい気持ちです。どの子もその子の合理性のもと、ある種の生存戦略を持って、生活しているわけですから、そうした本人からのアウトプットを何はともあれ一旦引き出すことこそ、いの一番で行うべきことではないでしょうか。A相手の口を塞がないこと――これが、意外に思う方もいるでしょうが、社会構成員を養成すると謳う者（＝教育）が担うべき基本所作であると思うのです。企業で言えば、「心理的安全性」と呼ばれるものでしょうし、学校教育では昨今「安全基地」ということばで表現されていることに近いと思います。まずここにいていいんだな、と思わないで、何を学べましょうか。挑戦できましょうか。

あるエピソードがあります。寒い地方に暮らす小学校低学年のある子が、家族団らんで食事をするときに決まって、こたつから左手を出さずに、右手だけで食事をしていたそうです。母親はしつけに厳しく、「左手を出しなさい！　何度言ったら分かるの！」と連呼していたそうなのですが、一向に変わらず。ですがあるとき、他の家族が「家の中、寒くない？」と言い出し、室温を上げたら……なんと叱らずとも、その子は左手も出して、ご飯を食べているではないですか、というお話です。

「行儀が悪い子」「言うことを聞かない子」など、個人に評価を下すのは容易ですが、その人の在り方は、環境に大きく左右されています。環境に対するある種の合理性が必ずあると言い換えることもできる。「コラ！」の前に、「左手さぁ、どうかした？」と一言尋ねることができたらどんなにいいことか。それも鬼の形相で、ではなく。「働くということ」の大大大大大前提について、そんなことも思います。

同じような逸話が、組織開発現場でも語り草になっています。子どもの話だけではないわけです。まず相手の状態をありのまま受け止めることが、相手を評価し、教育してやろうなんて意気込む以前に不可欠であることの証左として、次の事例をご紹介しましょう。

とある組織開発の同業仲間が教えてくれた話です。彼のクライアント先に、とにかく「人の話を聞かない」ことで悪名高き部長がいたと言います。「ちょっと○○の件でご相談のお時間よろしいでしょうか？」と部下が相談に来るのですが、ミーティングルー

国語（その十一）

ムで座って三分もすると、「ってことで、一旦いいかな？　あとはよろしく」と帰してしまう。皆さんの周りにも一人くらいいらっしゃいますよね？　明らかにこの時間が無駄だと思っていそうな上司……。この人もそんな感じで、いわゆる「マネジメント力」が低い、ダメ部長のレッテルが貼られていたそうです。

イ、私の友人であるその組織開発者は、その事態を①ナガめる視点に特筆すべきものがありました。それもそのはず、彼の父親は、カイロプラクター（脊椎などにアプローチする手技療法。代替医療の一つを行う専門家）だったのです。甲というべきか、彼は問題とされる職場を観察しながら、はたと気づきました。もしかしてこれは……マネジメント力云々（うんぬん）ではなく、単に「座っているのがしんどい」って可能性もあるのでは？　と。そして思い切って部長本人に、腰痛がないか、話題を振ると、泣いて喜んだと言います。「ただでさえマネジメントできていないと言われ続けているのに、『腰が痛くて』なんて言い出せなかった。自席はさまざまなクッションなど工夫を凝らしているが、会議室の普通の椅子では三分でも座っているのがつらい！」と、堰（せき）を切ったように話し出したそうです。

その後、カイロプラクティックに通うようになり（！）、魔法がかかったように、話を最後まで聞く部長になったそうです。これをマネジメント力が上がった、と言ってはいけませんよね。人はその状態によって、文字通り「姿勢」が生み出されています。また、どんな状態にも、その人なりの「合理性」があるのだということも、やはりこの事例からも見て取れます。

「他者と働く」以前に「他者と動く」ことを体得するのが家庭や学校教育です。口を塞ぐことを教育だと思っていないか？　相手なりの合理性を吐き出させてあげられているか？　こんなことこそ、教育活動の基盤に据えていただけたらと願うばかりです。くれぐれも頑張る標的を「能力獲得」に絞るなどの間違いを犯さないことを祈ります。

このように、②サツバツとした労働環境を思うと、「働くということ」は、やっぱり簡単なことではないように思えます。個人が身につけるべき能力はBあまたに存在し、追い立てられる私たち。「実はちょっと……○○するのがしんどいです」と言うことはおろか、「もしかして、○○するのつらかったりする？　無理してるように見えるときがあって」などと、個人の事情（合理性）を探るような対話自体、弱音・戯言（ざれごと）・甘えの類として、忙しい職場などでは③イッシュウされてしまいがち。それくらい、こうした告

国語（その十二）

白にはその価値が認められていません。「弱い個人」は要らない、そんな突き放しにも感じてしまいます。

しかしこれまで見てきたとおり、「働くということ」に欠かせないのは、「一元的な正しさ」を強制力をもって教え込むことでも、それを体現する「高い能力」「強い個人」でもありません。［ロ］、どんなため息にも耳を傾けるような余裕、④フトコロのようなものが、望まれています。相手の口を塞ぐようなことが蔓延（はびこ）っていたら、それは「働くということ」がうまくいっていない証（あかし）です。相手が安心して真意を吐き出すことができる空間をつくった上で、それによって意見を交換すること。その際に、変えるべきは相手（他者）ではなく、まず自分のモードを問うてみる。真面目で一生懸命な私たちが引き続き頑張るとしたら、この点です。ᶜ誰かのものさしに合わせて、人を「選ぶ」ことでは決してありません。

余裕、なんて言うと、またこんな声も聞こえてきそうです。「ᴰんなもんあったら苦労してないわい！」「忙しくてそれどころじゃないわい！」と。でも、それも本当でしょうか。これまでの話を総動員して、最後に解きほぐしたく思います。結論は言うまでもなく、「余裕のなさ」もつくられた状況に過ぎない、ということです。そのカラクリに気づいて、捨てるべきは捨てていかねばなりません。何に、そう思わされてきているのでしょうか？　それはどう考えることで、捨象できそうでしょうか？

「そんな余裕はない」とよく聞きますが、逆に問題提起してみたいと思います。余裕はないのだとして、「何はあるんでしょうか？」と。こう問われた人は半ギレできっとこう答えるでしょう——「他にやらなきゃいけないこと、仕事が山積みなんだよ!!」と。

でもちょっと待ってください。「仕事」とラベルが貼られた何かと、そうではない「仕事外の余暇、遊び、余白」というラベルの貼られたものがこの世にはあるかのような言いぶりですが、それは事実でしょうか。「他者と働く」にあたり、他者の真意に耳を傾け合うことは、「仕事ではない」と誰が言えるでしょうか。つべこべ言わずにやれ、とは権力者の言い分です。黙々と働く労働者を良しとしてきた時代は過去にはあったでしょうが、今もその価値観で、複雑化した社会を乗り切れそうでしょうか。

（勅使川原真衣『働くということ「能力主義」を超えて』による）

※　問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

国語（その十三）

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 傍線部**A**「相手の口を塞がないこと」とあるが、それはなぜか。その説明となるよう、次の文の空欄に入れるのに最も適切な部分を本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

［　　］から。

問三 空欄**イ**、**ロ**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

① さらに　② つまり　③ だから　④ むしろ　⑤ ただ

問四 空欄**甲**に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 肝胆相照らす　② 門前の小僧　③ 割れ鍋に綴じ蓋
④ 昔取った杵柄　⑤ 蛇の道は蛇

問五 傍線部**B**「あまた」とあるが、これの対義語を書きなさい。

問六 傍線部**C**「誰かのものさしに合わせて、人を『選ぶ』こと」とあるが、いつも一つの基準や規則に囚われて応用が利かないという意味を持つ四字熟語になるように、次の空欄に漢字二字を入れなさい。

杓子［　　］

国語　（その十四）

問七　傍線部D「んなもんあったら苦労してないわい！」とあるが、このような発言をする者にどのようにアドバイスしたらよいのか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 複雑化した社会を乗り切るためにも、仕事と余暇や遊びの区別をやめてしまったらどうですかとアドバイスする。

② 「余裕のなさ」もつくられた状況に過ぎないのだから、余裕があると思ってみたらどうですかとアドバイスする。

③ 相手をありのままに受け入れた上で、相手を評価し、教え導いていくようにしたらどうですかとアドバイスする。

④ 能率を上げて余裕を生むために、黙々と働くのではなく、みんなで楽しく働いたらどうですかとアドバイスする。

⑤ 安心して発言や行動ができる環境を作ることも重要な仕事であると発想を変えたらどうですかとアドバイスする。

問八　本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えなさい。

① 頭ごなしに子供を叱りつけるのではなく、何が悪いのかを具体的に言葉で説明しなくてはならない。

② 複雑化した社会を生き抜いていくためには、一人一人生きる力を身につけていかなくてはならない。

③ 「低い能力」「弱い個人」とレッテルを貼られている人も、一つのものさしを基準にしての話である。

④ 「働くということ」は簡単なことではないので、とにかく真面目に一生懸命に頑張らなくてはいけない。

⑤ 学校教育においても企業においても、口を塞がず、自分の考えを口にしなければ何事も始まらない。